



人権文化の花を咲かせよう

▼参加者の声

木村留里子さん（西条西中教諭）

毎回、勉強になるので、新たな自分の中にいる醜い心と向き合えたり、すばらしいものはすばらしいと心の底から感動できる場面もあるので、参加していてありがたいし、しあわせな気持ちでいます。同和教育は差別される人のためにあるのではなく、私たち自分自身のためにあるということを感じ取っていただきたいなと思います。

渡辺正広さん（会社員）

勉強会や内容を聞いてみると、共感できる場所がありまして、少しでも力になればいいなと思って参加しています。劇中にもありましたけど、仲間みたいな形で繋がりができたので続けさせてもらっています。

谷口 晃さん（小松小教諭）

この取り組みのすばらしさを知ったので、仲間の輪を広げて、僕ももっと主体的にこの会を発展させた取り組みをできたらなと思います。

一色由美子さん（石根保育所長）

この会に参加して、いろいろなかたと出会ったことがありがたかったですね。保育所では、毎月、就学前同和教育部会という会をしているので、職員にも人権意識を高めていくいい機会になったと思います。

▼会場の声

○ふだん若い人たちは差別問題を感じることがないですけど、そういうことは今までずっとあってきたことだから、若い人らも風化させるのではなくて、考えていかなければと考えさせられました。（20代男性）

○ふだん考えることがないテーマなので、こういう機会があれば、家庭で話す機会ができてくるので、とてもいいなと思いました。（30代女性）

○胸がいっぱいで涙が出そうでした。人権問題は一人ひとりが解決していかないとけない問題だと思いました。（40代女性）

○何回かこういう会に来たことがあったけれども、今回の劇は内容がよくわかって、たいへんよかったと思いますよ。（70代男性）



▲政男（写真中央 谷口さん）は家族と共に差別と向き合って闘うことを決意する。

演劇だけではなく定期的に学習会を開催したり、他のグループとの交流を深めるなど、その活動内容は多種多様です。

PTA活動がきっかけで参加されている茨木真由美さん（会社員）は「身近なことが話題となっていて、子どもとの話し合いの材料になっています。あと、自分自身を振り返って、いろんなことを前向きに考えるようになってよかったです」と話しています。

これからの人権啓発は、自発的に

プロジェクト2008がめざす完全解放の年2008年は、1871（明治4）年に「解放令」が發布されてから55年（1938年）目の年に当たります。55年とは解放令に反対する勢力が「そのお触れは5万日日延べになった」と被差別民衆を愚弄した事件によるもので、人間解放を妨害しようとする暗闇の歴史に對抗して、2008年を熱と光に満ちた、差別のない世の中にしようと

輝く未来へ向けて地域コミュニティは芽吹いていく。

「劇団とかではなくて、学習の場としての集団でありたいというのが僕たちのスタンスなんです」と語る

「僕は自身もこの劇を通して勉強しているんです。キャストで演じている人だけではなく、スタッフとして関わっている人もこの劇を周りから見ることで勉強しているんです。そういうことを見ているかたに、少しでも分かってもらえたらと思います」

演劇だけではなく定期的に学習会を開催したり、他のグループとの交流を深めるなど、その活動内容は多種多様です。

進んで取り組んでいくことが大切だと野村さんは言います。

ただ劇を演じるのではなく、脚本を作る人、演じる人、道具を用意する人、参加するすべての人がアイデアを出し合って劇を創り上げていくことで、差別がなんであるかをより深く学んでいけるのです。



▲輝く未来へ向けて地域コミュニティは芽吹いていく。